

2 第1波を撮影した写真の検討

別表で整理した写真1～写真4と第2波の4号機海側エリア着岸を撮影した写真11との撮影時刻差を、波高計の実測波形の第2波が波高5mを超えて立ち上がる時刻から遡って書き込むと図3の通りとなる（国会事故調報告書参考資料＝甲第2号証71ページ）。

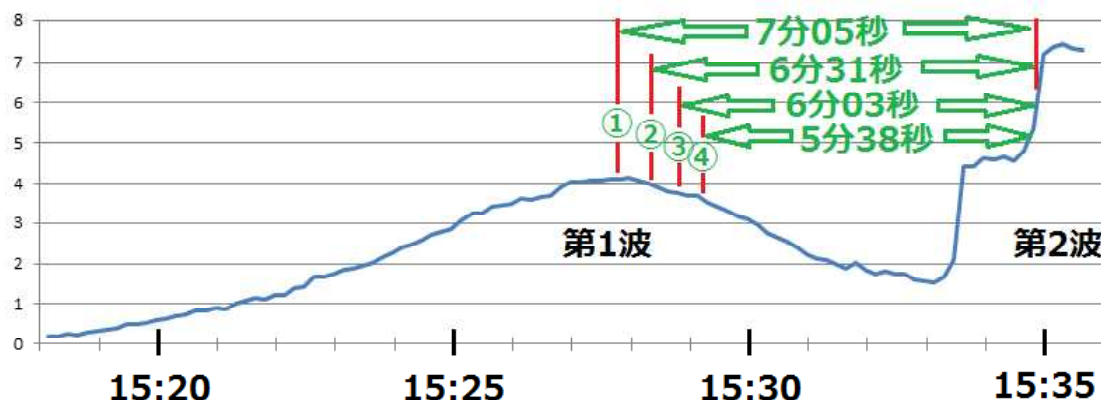


図3 第1波写真撮影対象説明図

この図の波高計の波形は図1と比べると緩やかに見えるが、それは横軸の時間幅が大幅に拡大されていることと測定値の時間刻みが異なるためで、波高計の実測波形であることには違いはない。

津波の波形が変わらなければ、写真11が第2波が4号機海側エリアに着岸したところを撮影したものであるから、写真1～写真4はそこから撮影時刻差分だけ遡った第1波の該当部分が福島原発敷地の位置に達したところを撮影したことになる。

第3でも述べたとおり、第1波の本体は極めて緩やかに水位が上昇する波であり、10分あまりで4mの波高上昇は、福島第一原発周辺の水深10mでの津波の進行速度が600m毎分程度であることから考えれば600mに対して40cm、すなわち傾斜角度（仰角）0.04度という傾斜が看取できないレベルの波であるから、外観上は速い満ち潮のようなものである（これに上下幅最大数十cmの波浪が伴う）。従って、第1波が海側エリアに浸水する場合は、防波堤や東波除堤は水没した状態に見えるはずである。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4

図 3 からすると、写真 1 ～写真 4 は第 1 波のピーク近辺を撮影したものであるが、写真を見ると、防波堤の最上部近辺まで水位が上昇し、東波除堤も上部まで水位が達しており、波浪の上部が防波堤をわずかに越えようとしているところも見られるが、防波堤も東波除堤も水没していない。

また、この写真はほぼ 30 秒おきに撮影されているところ、第 1 波の波形から考えて第 1 波の本体が 30 秒程度のうちに大きく上下することはない（波浪は別だがその上下幅はせいぜい数十 cm）。

従って、この写真の防波堤や東波除堤の状態だけを見ても、第 1 波が海側エリアに浸水したということはありません。

しかし、疑い深い人のためにさらに厳密に検討してみよう。

これらの写真上、海側エリア（4 m 盤）の盤面は明確には見えていない。しかし、南防波堤の脇に見える「取水ポンプ室」という建物は、4 m 盤上の建物である。この取水ポンプ室が盤面まで見えるかを確認することによって、4 m 盤への浸水があったかを判断することができる。取水ポンプ室を図示して写真を再掲する。